



自治医大を卒業後、徳島県に戻ってはや二十一年目になりました。故郷を唯一離れた栃木での六年間は、一生忘れることのできない思い出いっぱい青春時代です。

### 代診医師確保を

卒業二十一年間のうち、へき地診療所勤務は通算九年間。卒業五・六年目に、初めての一人医師診療所。卒業七・八年目に、二回目の一人医師診療所。三回目は、町長や町職員、そして町民とともに、保健医療福祉サービスを総合的に提供するための施設づくり(包括ケアセンター)とその運用に携わり、一人

# へき地医療と人々を支援

医師診療所から複数医師制へ移行した五年間でした。 私なりに感じたこと、まず、へき地診療所の代診医師確保があります。そして、ソロフ

を目標としました。 高知県境にある山間部の出張診療所(徳島市から約百十キロ)近くに住む女性で、卒業五年目に私が赴任したときは八十歳、現在九十六歳になる方です。十一年以上りに診察させて頂いたときには、とても懐かしう喜んでくれました。

かまむら **鎌村** よしたか **好孝** 9期生・1986年卒



笑顔で迎えてくれる患者さんがいる。この女性は撮影時94歳だったが現在96歳になる。2004年、高知県境にある山間部の出張診療所診察室

## 徳島県立中央病院

【私の勤務地】徳島県は、対人口比医師数が東京都に次いで第2位の医師過密県。しかし、都市部に偏在が著しく、勤務医不足、地域・診療科の偏在も顕著。徳島県立中央病院地域医療センターは、へき地医療拠点病院として全県域対象のへき地医療支援事業と地域医療連携事業等を主業務としている。

私は二〇〇一年度から、徳島県立中央病院地域医療センターで、へき地医療支援機構専任担当者兼へき地医療拠点病院医師として勤務しています。へき地医療の現場が困っている。へき地で現場の医師たちが頑張っている。へき地の住民が困っている。そうした現実を、まさに私たちを必要としています。 私たちはへき地医療を支援し、へき地の住民を支援し、へき地で頑張っている医師たちを支援しているのです。

### 変わらぬ笑顔で

本年度、医師確保は一層厳しく、要請すべてには応えきれないと思います。が、当センターでは四月から、木下英孝医師(自治医大三期卒)と主に二人でそ

ラケティス(一人医師診療)より、医師複数制を求めていくことを目標としました。

れぞれ、週に四・六日、山へ島へと、県内各地のへき地医療支援に駆け回っています。

さて、私のへき地医療の源流は、こんなところにもあるのかなと思っている写真のうちの大抵一枚があります。

また、私がへき地医療にかかわる仕事が続けられるのは、家族の理解と支持があるということも心の大きな支えです。 私は、通算九年間のへき地医療現場経験をもとに、今、また違った(新たな)形でのへき地医療六年目を堪能しているところです。

(次回予定は山梨県)